

いひ、又七流八橋の口碑も今尙残つてゐる。この話は美濃の太田にも又犬山其の他にも残つてゐる有名な傳説である。

第五節 年中行事及休日

一、年中行事表

- 一 月
- 一 日 四方拜。神社参拜。各學校官衙拜賀式。一般は休日。
 - 三 日 元始祭。
 - 四 日 御用始。
 - 八 日 各學校第三學期始業式。
 - 二十日 初年兵入營（元は十日）
- 舊 一月
- 一 日 主人又は其の家の若い男早朝起床して若水を汲み、恵方に向つて神々を拜み家内中して主婦の外揃つて氏神参拜をなす。主婦は家に在り豆木にて雑煮を煮る。氏神参拜を終り家の神佛へのお参り終れば揃つて雑煮を食ふ。凡て出し入れ其の他悪しきことを今日一日は戒める。

- 二 日 萬事の手始である。子供の書初め。商家の賣初め。一般人の買初め、農家はうち初め。
- 三 日 三日正月とて此の日は夕方まで遊ぶ。門松を取る。昔は正月三ヶ日中に神官檀那寺庄屋等へ年賀にゆく風であつたが今は行はれず、親類はお節とて十五日までに往き來する。参賀者には年酒とて酒に煮豆數の子田作なごを出す。これは豆で數ある子が田を作る様にとの意味である。
- 七 日 七日正月と云つて朝菜粥に餅を入れて食べ一日中遊ぶ。別名七草祝ともいふ、これは「芹薺五行はこべら、佛の座すず菜、すずしろ、これぞ七草」と歌つて七草を切りこれを粥の中へ入れたからである。これは疫邪を防ぐ呪なりと傳ふ。
- 十四日 さんざやきと稱し正月飾りつけの門松竹、うらじろ、七五三繩神札等を神社にて（主に）やく兒童は書初めを焰の先へ出して高くあげる。高く上るはぎ手が上るといつて喜ぶ。火勢が下火になると餅をやき家にもち歸り家内一同分食する。これはこれを食べると夏病をしないと。又さんざやきの竹のふしを持ち歸りて家の屋根又は土中に入れると火災を防ぐと。又この日親戚知己より贈られし破魔矢羽子板を近隣への兒に分與す。
- 十五日 朝豆粥に餅を入れて煮る、この日は十五日正月として一般に遊ぶ。この朝青竹に豆木をそへて焚き爆音の大きいのを喜ぶ。そしてこの朝まで竹をやくことを忌む。
- 十八日 十八日粥といつて十五日残しておいた粥をませてたき惠比壽様に供へて食ふ。この日繼鹿尾へ初観音とし

て参詣する人多し。

二十八日 秋葉祭

お日待 正月の中か二月の初めにお日待といつて各組毎に各戸一人づゝ出て會食するこれはもと日のお祭りをしてそのお祝に御馳走したのが現今の如くなつた。

二月

十一日 紀元節

舊二月

一日 重の朔日

三日頃 三日頃は節分、鬮の頭に豆木をさして柊の枝と共に戸口にさし福は内鬼は外と呼んで豆撒きをする。

七日 山の講とてあそぶ。

十五日 涅槃會を寺で行ふ。「おはなもち」とて色彩をつけた粉餅を子供に分けてやる。午後は遊ぶ。

初 午 稻荷様へ参る。寺では「ハンニヤ經」をくり「ゴマ」をたく。この朝正月餅をやき、からしあへの菜をつけて食す。

二十五日 天神講、古はあそんだ今は云ふのみ。

三月

六日 地久節

十日 陸軍記念日。 村招魂祭

十八日 此の頃彼岸入、

二十一日 此の頃春分、春季皇靈祭、彼岸詣

下旬 各學校卒業式。

舊三月

彼岸 春と秋の二季の彼岸中各寺院では彼岸勤をする。老人は彼岸詣とて各寺院を巡拜する。

三日 上巳の節句とて雛人形をかざり菱形に切つた草餅を供へ桃や椿を花瓶にさし別に繕部を供へ淺蜩と田螺とはかならずつきものの如し。親戚からは最初生れた子に内裏様、汐汲み人形などを贈る。

結婚後最初のこの節句には夫婦同伴して嫁の實家を訪ふ。そして毎年親もとへ菱餅を贈る。

二十一日 弘法大師の命日とて大師を祀る家では餅菓子を一般参拜者に分與す。

四月

一日 各學校入學式。 第一學期始業式

三日 神武天皇祭 八日 犬山祭(見物にゆくもの多し)

二十九日 天長節

舊四月

八日 釋迦降誕祭。花祭りミ稱し寺方にては草花で屋根をふきし小さな堂の中で、甘茶湯を入れ其の甘茶の中に釋尊の立像を立て参拜者には甘茶湯を釋尊の頭から灌ぎかけさせ参拜者には甘茶を接待する。家々ではこの甘茶湯をもらつてきて呑む。

八十八夜 この前後に苗代をこしらへ糶をまくそして其の後苗代遊びとして一日あそぶ。

十七日 權現祭、家康の祭典日で古はあそんだ

五月

二日頃 八十八夜 五日 端午の節句(舊に多し)

二十七日 海軍記念日 下旬 春蠶繁忙期

舊五月

五日 端午の節句で前日に菖蒲と蓬とを屋根にさし(屋根をふく代りの簡略なり)。菖蒲風呂に入る。男の子のある家では數日前より誕生の時親戚からおくられた鯉のぼり、吹き流し等をたてる。赤飯をたき食べて遊ぶ。

六月

十日 時の記念日 十二日 入梅 二十二日 夏至

二十五日 皇太后陛下御誕辰

三十日 各神社大祓

下旬 田植、夏蠶發生、麥の取入

舊六月

一日 尾張富士石上祭。

前夜より各字若者連はフシ面白く石上歌を歌ひ動作を揃へて巨石を富士へ奉獻す。子供は子供なりに小石を大人の如くにしてはこび獻納す。この日農繁期となれば十五日に行ふ。天下奇祭とて女子も參詣す。また遠來の參詣者もあり。

十四日 津島祭。神詣をして遊ぶ。

十六日 祇園祭。俗に「うぎん」十六杯といひ「うぎん」をたべて遊ぶ。子供は川に行く「十六べんあびる」習

七 月上旬 農休 下中旬 夏蠶繁忙期

下旬 各學校夏休

舊七月

六日 墓掃除。養蠶の關係上日を改める所もあり。

七日 七夕祭。七夕節句とも云ふ。

學童は七夕紙に詩歌をかきて笹つきの青竹にかざり瓜類、穀菽類を供へ中央に菅公を祀る。そして夜は笹

竹の間に提灯をともし「おはぎ、うぎん」なごをそなへる。

七夕としてかざつた短冊は翌朝近所の子供に分與す。それは又雷よけの呪となると戸箱近くに保存する家もある。

この頃中元の贈物として親戚知己の間に扇子履物なごを贈る。

十日 九萬九千日と申して繼鹿尾の觀音様に詣る。

十三日 十五日までを俗におぼんといつて祖先の位牌を蓮の葉の上に並べて祀る。十四日は終日精靈に仕へ、檀那寺よりは各戸へ棚經といつて讀經に廻る。十五日の晩はその供物を舟形をつくつたものにのせ、松明をもして附近の川へながす。これを精靈送りと稱す。この時出かけには表で松明をたいて送り火とする。近時は太陽曆により九月一日より行ふやうになつた。

二十四日 千蘭盆として寺詣なごする。子供は四つ辻で（かまごを作り辻飯をたきて食ふ）。近時餘り行はれぬやうになつた。

八月

八日 立秋 三十一日 上半期勘定日

中下旬 秋蠶繁忙期

舊八月

一日 八朔といつて赤飯をたきて遊ぶ。これは今より約六百年前御深草天皇の建長年中に始まり秋の田の實を祝ふ。

八日 八才の子供のある家では八つ八月と云ひて親戚知己へ厄拂の餅を配り大縣神社へ連れ参り厄拂の祈禱する

九月

一日 二百十日 各學業始業式 此の地方では、養蠶の關係上一二日お盆とす。

十三日 乃木會 二十日 此の頃彼岸の入り

二十三日 此の頃 彼岸の中日。 秋季皇靈祭。

舊九月

九日 粟節句又は重陽の節句と稱す。九は老陽の數にして月も日も老陽の數を重ねる故に九重陽。これより重陽の節句と稱す。赤飯に栗を入れてむし。神佛に供して後食す。この節句は災難よけなり。

十三日 別名豆名月と稱し、莢豆、甘藷なごを供へ各自たべ、後の月見とて月見をなす

十七日 お十七夜とておはぎを作りて食ふ。

晦日 お神送りとておこもりをなす。

十月

十三日 戊申詔書下賜記念日 十七日 神嘗祭
中 旬 此の頃各字氏神祭禮

二十日 二十七日 村内に祭禮ある。

三十日 教育勅語下賜記念日

下 旬 各校運動會。補習學校授業開始

舊 十月

亥の子 亥の日稻の豊作を喜んで牡丹餅をこしらへてたべるのである。

八 日 薬師講お参りしていろく祈る晩。

十 日 金比羅祭午後遊ぶ、神祭をする 一日汁かけ飯を遠慮する

二十日 商家の祝蛭子講として恵比壽様大黒様の二福神をまつるおはぎを近所にくばり、近所の子供達に菓子を分與す。

晦 日 お神迎、諸神様出雲の大社より歸りになるこいふのでお宮様にこもりてお迎へする。

十一月

三 日 明治節、全國體育デー

八 日立 冬

十 日 國民精神作興詔書下賜記念日

十五日 七五三祝、中旬 取入れ麥蒔

二十三日 新嘗祭

舊 十一月

七 日 大山祇大神を祭る。寺では大般若經をよむ。昔は「山の講山の講」と呼びおこもりし、めしをたいてたべた。

十六日 秋葉様にて火渡りありゴマ大般若經あり獅子等も出た。火難よけのため参詣者多し

二十八日 秋葉様祭、参詣者多し。

十二月

二十一日 冬至。冬至弘法詣。

二十五日 大正天皇祭。各學校冬休み始まる

二十八日 御用納め

三十一日 各神社大祓

上 旬 秋 祝

舊 十二月

- 一 日 乙子朔日唐土殿の世では「ウシ」の月を年のはじめとせし故殿の世の元旦なり 本村現在は古老云ふのみ
- 八 日 八日吹きいふこの日風吹かぬと明日大風吹くとて「吹かば吹け吹かぬば吹かず八日吹」きとて「トフ、アブラゲ」の汁をつくり食ふ習。近年少なし。
- 十三日 この頃煤拂ひをして正月をむかへる準備をする此の頃歳暮の贈答をなす。
- 十四日 義士會、講演、活動寫眞などあることもあり
- 餅 搗 二十五、六日より各戸行ふ
- 大晦日 門松をかざり砂をまき、神棚、佛壇並に職業の道具等に、鏡餅、密柑など供へ、夜は神棚に燈明をともす
そして如何におそくなつても一年中の勘定日として、借のあるものは返済して歩く又各寺院では深夜より
曉にかけて百八の除夜の鐘をつく。

第六節 民 謡

一、子 守 歌

一、ねんねんよ〜。川端柳水の流れを見て暮せよ。守と言ふ者、樂の様でつらい。朝ははよからたたきおこされ、晩はおそまで門に立つよ。

- 二、ねんねんよおこらいよ、坊やはよいこじやねんねしな、ねんねのお守はここへ行つた、お山を越へてお里へ行つた
お里のおみやげ何もろた、てんでん太鼓に笙の笛
- 三、ねんねんねとねさせる親は、神か佛か親様か
- 四、ねんねこる市、竹田の興市、竹にもたれて七興市よ
- 五、ばあばあばんげの子、日の出に生れた秀さの子
- 六、ねんねんよう〜おこらいよう〜
- 七、寒や北風、可愛や子供、賽の河原で屋根葺きやこわす。こわしや又積む、積みや又こわす。
- 八、寒や北風、可愛や子供、賽の河原で石を積む、石をつめば鬼が来てこわす、こわしや又積む、つみや又こわす
- 九、こんなよう泣く子は守やようせぬ、お暇おくれや旦那様。お暇あけたにござなとゆきやれ、わたしや機屋へくだま
きに
- 十、ねんねんよう、おこらいよう、ねんねしよねねしよねんねしよ、なんせなくのだねんねしよ、おらがだいじな〇〇
さん(〇〇の中には其の子の名を入れて歌ふ)
- 十一、もりさ子守さ今度の季はいくら、二貫五百にじより油。(じよりは草履の方言)
- 十二、守とよばるな守さと呼ばれ、守さ若い衆の花嫁御
- 十三、山はやけても山鳥やたぬ、子はご可愛い者はなし。